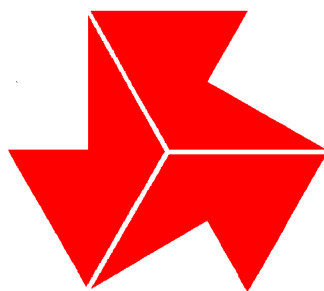


平成22年度  
第4回石川県高等学校体育連盟研究大会

# 研 究 紀 要



主催 石 川 県 高 等 学 校 体 育 連 盟

# あいさつ

石川県高等学校体育連盟

副会長 中島 敏一

石川県高等学校体育連盟研究紀要第3号が完成するにあたり、ご尽力いただきました関係各位に深く感謝いたします。

さて、全国高体連研究部では、全国研究大会のあり方を変えようとする取り組みが行われてきました。今年度の兵庫大会は、昨年度より行われた課題研究を継続し、各分科会での優秀な研究発表に対して、全国高体連研究部から表彰するということが初めて行われました。研究発表者にとって励みになるとともに、今後各都道府県高体連の研究活動の益々の活性化につながると思われます。

県内では、平成22年11月に第4回石川県高等学校体育連盟研究大会を青少年研修センターで開催しました。各専門部、各高等学校のご協力により、約100名の参加をいただき、ラグビー・ヨット・体操の各専門部から発表がありました。それぞれ内容の濃い発表で、他の専門部でも生かしていただければ幸いに思います。

県高体連による研究活動がより発展し、指導力や競技力が向上し、24総体をはじめとする全国大会等で、石川の高校生が躍動し活躍されることを願っております。

今後の石川県高等学校体育連盟研究大会がより活性化するよう、関係各位にさらなるお願いをし、あいさつにかえさせていただきます。

## 平成22年度 第4回石川県高等学校体育連盟研究大会開催要項

- 1 目的 石川県高等学校体育連盟に加盟する各高等学校の体育・スポーツ指導者の資質向上を図るため、日頃の研究成果を発表するとともに、当面する諸問題について情報を交換し、高等学校教育の一環としての体育・スポーツの振興・発展に資する。
- 2 主催 石川県高等学校体育連盟
- 3 日時 平成22年11月30日（火） 14:00～16:00
- 4 会場 石川県青少年総合研修センター  
金沢市常盤町212-1 TEL 076-252-0666
- 5 参加対象 石川県高等学校体育連盟加盟校の体育・スポーツ指導者
- 6 研究主題 「スポーツが自らの可能性と夢を拓く」  
～はばたけ！高校生～

- 7 内容 研究発表
- 「本校の国際教育とラグビー部留学生の受け入れ」  
～ポリネシアから能登へ、強き優しきラグーマンたち～  
発表者 ラグビー専門部  
日本航空高等学校石川 小林 学 教諭
- 「高校ヨット指導10年間の歩み ～全国制覇を目指して～」  
発表者 ヨット専門部  
羽咋工業高等学校 岩城 宏志 教諭
- 「体操競技の採点法と石川県審判員の現状」  
発表者 体操専門部  
加賀高等学校 矢田 英 教諭

### 8 日程

13:30	14:00～	14:10～	15:30～	15:45～
受付	開会式	研究質疑応答	指導助言	閉会式

「本校の国際教育とラグビー部留学生の受け入れ」  
～ポリネシアから能登へ、強き優しきラグーマンたち～

ラグビー専門部

日本航空高等学校石川 小林 学

## 1. 学校創立

2003年7月に開港した能登空港に隣接するかたちで、空港より一足早い4月に日本航空第二高等学校として創立した。山梨の日本航空高等学校は昭和7年に創立され、これまで幅広く航空従事者の養成を行ってきた歴史がある。能登空港は当初より羽田空港と午前、午後それぞれ一往復の定期便、その他台湾等からのチャーター便が不定期に運航しているが、一日の大半は空港が空くため、航空学園のフライト実習やグライダー部の活動、また入学式や学園祭等の行事で滑走路を利用させてもらっている。卒業生の半数近くは併設の航空専門学校に進学し、航空機整備士としてエアライン企業に就職、航空機の設計や製造に関する業務として重工業系企業に就職、また各地の空港にてグランドハンドリング業務に就くものが多くを占める。

現在は約440名の生徒が、航空機に関する実習や座学が中心となる「航空工学コース」と、主要教科が中心となる「普通科コース」に分かれ学んでいる。また生徒の9割以上が寮生活を営んでおり、北は北海道から南は沖縄まで日本の隅々から入学をしている上、60名ほど海外からの留学生も在学している。在籍している生徒の出身国は、中国、モンゴル、タイ、ベトナム、トンガ、ブラジルであり、以前は一年ほどパプア・ニューギニアからの生徒を受け入れたこともある。

## 2. ラグビー部の歴史

山梨の日本航空高校において1982年に創部されたラグビー部であるが、第二高校の開校に合わせ22名の新2年、新3年の部員が希望により山梨から輪島へ転校し、新たに入学した新1年生と合わせ30数名の部員でスタートを切った。開校式前の春休みには22名の部員で早速、羽咋工業高校や鶴来高校と練習試合を行い、40点以上の差を付けられて完敗した。予想通り力の差があることが分かったが、それよりも、突然石川にやってきたよそ者からの試合申し込みに、両校ともに二つ返事で受けてくれたことが非常に嬉しく感じられた。以来、ラグビー専門部の一員として各種大会の運営や石川県選抜チームの強化等に関わらせて頂いている。

2003年度、2004年度の全国大会県予選はともに準決勝で敗れたものの、2005年度には今回のテーマであるトンガからの留学生を受け入れ始めたこともあり、初めての全国大会出場を果たした。それ以来、昨年度まで5年連続で花園に出場し、2007年度には石川県勢としては初となる三回戦進出の実績がある。春の全国選抜大会には今年も合わせ2回北信越代表として出場している。現在も部員は30名程度であり、大阪や福岡をはじめとした県外の生徒が部員の9割を占めている。

## 3. トンガ人留学生の受け入れ

### (1) トンガ王国について

南太平洋に浮かぶトンガ王国は、南緯20度付近に浮かぶ170の島々からなる国である。首都ヌクアロファの年平均気温は23.7度。亜熱帯海洋性気候で南東貿易風の影響から比較的のぎやすい。立憲君主制ではあるが実際は国王の権力が強く、労働組合も女性参政権もなく、全ての土地は国王に帰属することが憲法で定められている。トンガ人は『ガリバー旅行記』の巨人国のモデルといわれる大柄民族で、成人男性の平均身長は180cm近く、平均体重は90kg。子供のころから男の子はみなラグビーに親しんでいる。また、大雑把に言うと国内人口は約10万人であるが、同時に国外人口も同程度存在するとみられ、その仕送りが重要

な収入源となっている（主にオーストラリア、ニュージーランドにおける出稼ぎが多い）。

歴史的にトンガは、南太平洋では最も古く 18 世紀末からキリスト教の布教が始まった。19 世紀前半には 3 王家間の内戦状態にあったが、キリスト教に改宗し教会の助けを得たトゥポウ 1 世が、1845 年に全諸島を統一しトンガ王国を成立させた。その後、1900 年から英国の保護領となるが、1970 年に独立し 1999 年に国連に加盟した。現在の国王はトゥポウ 5 世である。国内総生産の 60%を農業が占め、特産品のタロイモやスイカは豪州、ニュージーランドへ、またカボチャは日本へそれぞれ輸出されている。

## (2) 来日選手

当初は、学園として関わりのあった J I C A（青年海外協力隊）八王子支社に留学生紹介の依頼をし、トンガ J I C A 事務所の日本人スタッフが現地学校、ラグビー関係者に働きかけを行い留学生の来日に結びついた。最初に来日した生徒は下記の 17 年度入学生であり、先方からの希望により 1 名追加して 2 名としたことが、異文化への挑戦、ホームシックとの戦いという意味からもその後の順調な留学生受け入れに結びついたと思われる。

18 年度入学生の選定より、直接的に本校国際部とラグビー部監督が現地の代理人とファックス、メールを介し進めている。但し、ここでいう代理人とは、俗に言う“ブローカー”的な存在ではなく、以前日本の大学にラグビー留学をし帰国後にはトンガ労働通商産業観光大臣を務めた人物であって、本校に生徒を送り出しているトンガカレッジ（日本でいう中高一貫の男子校）の元 P T A 会長である。当然ではあるが一銭のマージンも謝礼も発生しない形で、彼の言葉を借りれば「トンガから日本への留学生斡旋で最もクリーンで最も理想的な関係」を進めさせて頂いている（代理人とは大東文化大出身のマサソ パウング氏である）。

以下、これまでに本校に入学した生徒を紹介する

### ① 平成 17 年度入学生徒



アイセア ハベア（入学時：174cm／83kg ⇒  
現在：176cm／100kg）

平成 20 年度、21 年度、U20 日本代表として J W C（ジュニア ワールドカップ）に参加。22 年度、日本代表 A としてスコットランド遠征に参加。現在天理大学 3 年に在学しチームの主力として活躍中。ポジションは C T B。高校時はキャプテン。



シアオシ ナイ（174cm／75kg  
⇒ 176cm／90kg）

平成 19 年度花園大会にて北信越地域最優秀選手として、高校東西対抗ゲームに出場。現在は天理大学 3 年に在学しチームの主力として活躍中。ポジションは F L。高校時は F W リーダー。

② 平成 18 年度入学生徒



レオンハード アケ (185cm/83kg)  
⇒ 187cm/110kg)

平成 22 年度U20 日本代表に選出され5月にロシア遠征。立正大学2年に在学して活躍を期待されたものの、諸事情により今夏帰国。

③ 平成 19 年度入学生徒



トニシオ パイフ (175cm/86kg)  
⇒ 177cm/100kg)

平成 20 年度、21 年度高校日本代表としてウェールズ、イングランドに遠征。22 年度はU20 日本代表に選出され5月にロシア、8月にタイに遠征する。現在天理大学の1年生に在学しチームの主力として活躍中。ポジションはCTB。高校時はキャプテン。

④ 平成 20 年度入学生徒



テビタ ツポウ (182cm/87kg)  
⇒ 185cm/100kg)

平成 21 年度高校日本代表候補に選出。現在は膝の怪我によりリハビリ中であるが、サイズや運動能力、メンタル面で本校留学生の中では最も将来性が高い選手である。来春には大東文化大学に進学予定。ポジションはNO. 8。チームではバイスキャプテン、FWリーダー。

⑤ 平成 21 年度入学生徒



モセセ トンガ (172cm/80kg)  
⇒ 173cm/88kg)

特に代表歴等はない。小柄ではあるものの総合力とワーキングレートが高く、現チームで不可欠の存在として活躍中。ポジションはCTB。



## ⑥ 平成 22 年度入学生徒



オネセマ ハフォカ

(188cm/100kg)

今年 4 月に来日。恵まれたサイズを生かした突破力が魅力。筋力面と精神面、ラグビー理解度でまだまだ先輩たちには及ばない。

## (3) トンガ訪問

平成 20 年 3 月に、本校の国際部長とラグビー部監督でトンガへ初めての訪問を行った。最初に来日した 2 名が本校を卒業したばかりであり、5 人目の生徒が間近に控えた留学の準備をしている時期であった。主な目的は、トンガカレッジとマサツ氏の表敬訪問、来日生徒の家族訪問、次年度留学生との情報交換等であった。訪問したポイントは次の通りである。

### ① トンガカレッジの風景

#### ア ランチ

特に食堂がある訳でもなく、そこら辺の地べたに座りイモ一つを食すのみである。訪問した日はたまたま週に一度のスペシャルデーでスープが付いていた。



#### イ 校内の風景



自然光のみの暗い教室で、みな真剣に授業を受けていた。先生と呼ばれる人たちが腰につける“ラバラバ”と言われる腰蓑の威力は絶大である。



## ②家庭訪問

大事な来客には家族皆でもてなし、テーブル中央には必ずブタの丸焼と、生魚の切り身のココナツミルク漬けも用意されていた。食事は、家長の貴重な、重いお祈りの後に始められる。



## 4. 留学生の指導

### (1) ラグビーのプレースタイル

トンガと日本ではラグビーの基本的スタイルに大きな違いがある。当然に体の大きさや身体能力、そして文化的相違からくるものであるが、大きく分けてトンガのプレースタイルは「個人」「パワー」「シンプル」であるのに対し、日本のそれは「組織」「スキル」「システム」と言える。体が太く大きく、そして何よりも体幹の強靱なトンガ人たちは、ボールを持ったプレーヤーが個々の能力で突破を狙い、個々の判断でそれをサポートし *try* に繋げていく。そのため、練習内容も個人の能力を上げるフィットネス（持久力アップ）や筋力トレーニング、そして実際のゲーム又はゲーム形式の練習が中心となる。一方日本人は、外国の強豪チームを相手とする場合は勿論のこと、個人ではなく組織的な突破を図ることが基本的な狙いとなる。バックスが複雑なパスプレーで陣地をゲインしていくこと、そしてフォワードがモール（数人で立った形で組み敵と押し合うプレー）攻撃で *try* を取ることもその一つである。そのため、練習は個々の身体を強くするトレーニング系は勿論、その上で各自のスキルアップやフォワード・バックスそれぞれのユニット練習も多くなる。また日本では、チームとしての決めごとを重視したプレーが求められる。『ここでこう動けば相手はこのようにくる。だから我々はこうする。』といった理論的ないわゆる「システム」であり、そのための話し合いやレクチャーがミーティングルームだけでなく、グラウンド上においてもしばしば練習がストップして行われている。

### (2) 指導の留意点

総じて組織や決めごとが好きでないトンガ人選手たちであるので、チームシステムに沿った中においても彼らのプレーには他の選手たちよりも自由度を持たせている。日本人であれば、状況をみてこれ以上は無理をしては良くないという一線があるが、トンガの選手たちにはその判断をある程度個人に任せており、実際に試合に出場する2名の留学生の一人がチャンスを作り、咄嗟の判断によりもう一人の留学生がチャンスを広げ *try* を奪う場面も多い。そのあたりは、まだまだ本校の他の選手では出来ない領域であり、今後見習っていかなくてはならない。

しかし、攻撃面ではそれなりの自由度を持たせているものの、ディフェンス面ではほぼ完全にチームの決めごとで“はめ込んで”プレーをさせている。チームごとのディフェンスの種類にもよるが、本校では全国大会で関東や関西、九州の格上に勝つという目標の元にチーム作りを行っており、そのためには防御面で強い相手に対して「個」ではなく、「組織」で相対することが絶対条件である。よって、いかに強い留学生であっても組織ディフェンスの一部として、他者と同じ動き、チームとして決められたコースを徹底することを求めており、日ごろからその点を指摘している。



### (3) その他

#### ①キリスト教

トンガにおいても日曜日は安息日であり、学校も仕事も休みでお店も開いていない（右の写真は生徒家族に案内された教会で、イースターに因んだ劇を町の子供たちが演じていた）。初年度、本校に入学した2名も、「日曜に練習する訳にはいきません」と訴え輪島市内の教会に連れて行ったこともあったが、6月になり公式戦が絡んでくる時期となり本人たちも諦めた。練習は休みたいが試合には出たいという気持ちが垣間見られるが、それ以降、その後の留学生も含めて一度も教会に連れて行くことはない。彼らが聖書を手にしているのを見たのは、手術のため入院することになった病室のベッドにおいてただ一度だけである。



### 5. まとめ

17年度に初来日した際地元の新聞社やテレビ局から取材をして頂いたが、今後の抱負を問われたアイセアハベアが「先生方をリスペクトしていきたい」と語ったことがとても驚きであり、今でも忘れられない。トンガでは、昔の日本がそうであったように、両親をはじめ祖父や祖母、学校の先生、そして国王に対する忠誠心や敬う心が普遍であり、それぞれ外国にちらばってはいても家族の絆が大変に強く感じられる。以前校内において、日本人のある問題生徒が指導する教員に歯向かい掴みかかったところ、それを見たトンガ人が激昂し、その生徒を床にひれ伏せさせた場面があった。別のトンガ人は、「日本の生徒の先生に対する態度はトンガでは考えられない」と語っていたこともある。

そこから見えてくるものは、トンガ人を指導するにあたっては、当前のことであるが教員と生徒の立場や、誰がボスであり誰が君を養っているかという家父長制的な部分をさりげなく、時にはっきりとさせることが重要であることだと感じる。ポリネシアの国々は、首長が絶大な力を持った伝統的社会制度を今でも色濃く残す地域であり、お隣の国サモアほどではないにしろ、トンガ王国にも十分にその要素は残っていることが分かる。

最後に、トンガに対する個人的な見解で恐縮ではあるが、昔の日本にあった素朴さ、家族の絆、そして子供たちの“らしさ”というものが大変魅力的に感じられると同時に、南太平洋の小島から来た彼らから学ばなくてはならない部分が、今の日本には少なくないのではないか。

## 高校ヨット指導 10年間の歩み ～全国制覇を目指して～

ヨット専門部  
羽咋工業高等学校 岩城 宏志

### 1. はじめに

羽咋市は本州の中央部にあって、日本海に突出する石川県・能登半島。羽咋市はこの半島の基部西側に位置する。ほぼ中央に広がる邑知潟低地の平野部を囲んで海手山手に集散している。東側は宝達丘陵の一つである碯石ヶ峰（461m）を仰ぎ富山県氷見市に接し、西側は日本海に臨み、千里浜海岸線はなぎさドライブウェイがある。その千里浜沖が、羽咋工業高校ヨット部の練習海域である。（Fig.1）

ヨットの指導者としての10年間。千里浜沖で生徒達と共に、「夢の実現」に向けて帆走った歩みを、取り組んできた研究を交えながら報告する。

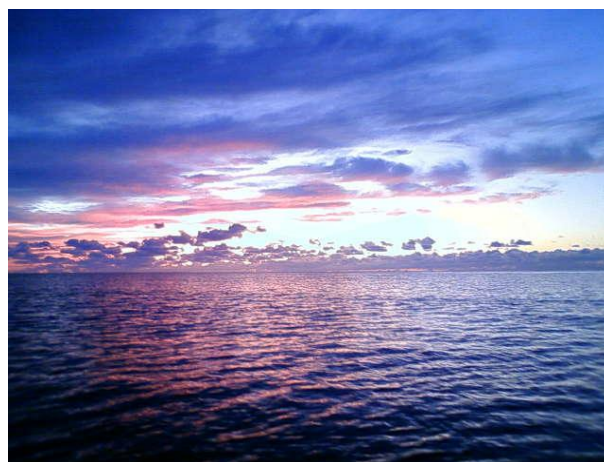


Fig.1 千里浜沖の練習海域

### 2. 石川県立羽咋工業高等学校ヨット部の紹介

1987年 創部

☆全国高校総体

出場回数： '89～ 22年連続 22回

過去の成績： [優勝] 1回  
[3位以上] 3回  
[入賞] 4回

☆国民体育大会

出場回数： '89～ 22年連続 22回

過去の成績： [優勝] 2回  
[3位以上] 2回  
[入賞] 7回



Fig.2 ヨットレース風景

#### 「近年過去5年間の実績」

- ・'10～'01 北信越高校選手権 男子F J級・女子F J級ソロ・デュエット 優勝 ※10連覇（継続中）
- ・'10～'02 石川県高等学校運動部活動強化指定部 9年連続指定（'10年度男子B指定・女子B指定）
- ・'10～'04 日本セーリング連盟 ユースナショナルチーム候補選手輩出（継続中）
- ・'09 国民体育大会 少年女子セーリングスピリッツ級 7位入賞
- ・'09 全国高校総体 女子F J級ソロ 6位入賞
- ・'08 ユース世界選手権出場 ニュージーランド・オークランド
- ・'07 国民体育大会 少年女子セーリングスピリッツ級 優勝 ※本校16年ぶり2度目の全国制覇
- ・'07 全国高校総体 女子F J級ソロ・デュエット 3位入賞 ※インターハイ過去最高成績
- ・'06 ユース世界選手権出場 アメリカ・ロサンゼルス

#### ☆現在の部の状況

部員 : 26名  
3年生 6名(男子4名、女子2名)  
2年生 11名(男子7名、女子4名)  
1年生 9名(男子5名、女子4名)

顧問 : 2名  
2000年～ 岩城宏志  
2010年～ 長谷川友紀



Fig.3 平成 22 年度部員 26 名

#### ☆必要な資質

- ・的確な判断力
- ・強風時における体力
- ・微風時における繊細な神経と忍耐力
- ・新しいものに前向きに取り組む姿勢
- ・学習面と両立しようとする意欲

### 3. 部活動における研究・指導の歩み

#### (1) 普及・振興

ヨット競技はマイナースポーツである。ヨットという競技を広く多くの方々に知ってもらうことが大切であると考えた。そこで、第一に本校ヨット部をアピールすることを目的に、以下の活動を始めた。

##### 「取組①」ホームページ開設

- ・2001年羽咋工業高校ヨット部公式ホームページを開設(アクセス数:現在93,719件)

アドレス : [http://www.geocities.jp/uko\\_yacht/](http://www.geocities.jp/uko_yacht/)

- ・ホームページ内容

プロフィール(過去競技成績、部員数、活動場所)、練習活動日程、今年度レース結果  
レース・合宿写真、掲示板、ヨット関連リンク、顧問部屋(顧問の日記)

○結果:保護者、卒業生、他県関係者、多くの応援して下さる方々が本校ヨット部の現状を知ることができるようになり、ヨット競技振興に繋がった。また、保護者の方々が子供の卒業後も応援して下さるようになり、卒業生と共に長くヨット部を支援して下さっている。

○課題:掲示板の運用面、更新の大変さ

##### 「取組②」ヨット教室の開催

- ・以前まで行ってきた大人向けの教室を、2002年から小中学生対象に切り替えた。
- ・ヨット教室の主催は、国立能登青少年交流の家と羽咋市セーリング協会が行い、ボランティア講師として本校ヨット部員全員を指導者にし、1泊2日の日程で行う。
- ・参加者は小中学生で20名。参加者の体格・年齢に応じたヨットを準備し、高校生のマンツーマン指導。

○結果:参加募集20名に対し、今年は80名近くの応募があるなど、年々参加希望者が増えている。また、ヨット教室に参加した生徒が、本校ヨット部に入部するようになった。指導している高校生の「教える」という活動が、心の成長に繋がっている。

○課題:日々の練習と教室の両立。主催者との連携。艇の更新。



## (2) 地域交流、世代交流、異なるスポーツへの参加

地域の方々や世代を超えた年代の方々との交流により、普段の練習や大会では経験できないことを部活動の中に組み込んだ。部活動の中で育まれる、高校生の「心の成長」を促進する。

### 「取組③」クラブアルバイトの導入

- ・2004年より羽咋市に本社がある(株)八幡さんにて本社勤務する。
- ・クリスマス前後と正月前後のオードブル造りを行う。
- ・1人3日勤務。冬休み合宿とクラブアルバイトとの2グループローテーション活動。

○結果：当初始めた最大の理由は、その年遠征資金が乏しい中、生徒自身が「みんなでアルバイトして、県外までのヨット運搬費用にしよう」ということから始まった。現在は今後も八幡さんから長く続けてほしいとの要望をいただいております、地域貢献に繋がるようになった。生徒自身も忙しい仕事内容や会社内でのおじちゃんおばちゃん達との交流が、心の成長に繋がっている。

○課題：練習とアルバイトの両立。

### 「取組④」3か月間の大学生との合同合宿練習

- ・2002年秋より、七尾市七尾湾で活動する金沢大学ヨット部との合同合宿練習を行う。
- ・金沢大学は土日合宿をしており、土曜の晩は大学艇庫と一緒に泊めていただく。
- ・海上練習では同じ海面でレースをする。食事は、大学ヨット部マネージャーが3食準備して下さる。

○結果：石川県のヨット競技は羽咋工業高校と金沢大学が柱となっている。その2団体が一緒に活動することにより、相乗効果が生まれ両部ともに競技成績が向上した。また高校生は大学でも競技したいと希望する生徒が増加し、金沢大学においては大学1年生が高校生の生活指導をすることで、先輩としての自覚と責任感が芽生えている。

○課題：両部員数増加により、艇庫生活環境と艇置場の確保。

### 「取組⑤」ヨット競技以外のスポーツ大会への参加

- ・2004年冬より、冬場のトレーニングの一環として、石川県耐寒継走大会に参加(ヨット部女子)。昨年度からは県高校駅伝に学校代表選手として参加(女子)。
- ・2008年より、七尾市で開催されている全国ドラゴンボート大会に参加。

○結果：ヨット競技以外のスポーツ大会参加により、普段とは違った緊張感と活力が生まれる。今年度ドラゴンボート大会は3回目の出場であったが、初の入賞(2位)を勝ち取り生徒達のチームワーク向上にも繋がった。七尾市は参加者募集に苦勞しており、今後も参加しながら地域の方々に高校生の若さとパワーを届けたい。

○課題：競技と練習と大会日程の調整。



Fig.4 駅伝大会参加



Fig.5 ドラゴンボート大会参加

(3) 世界を目指して

ヨット（セーリング）競技最大のビックレースはオリンピックである。ヨット競技において、北陸は冬場の練習量の確保が難しく、そういったハンディキャップを克服しながら全国の選手と戦う。高校生までは花開かなかった選手達も、大学やその後の実業団で競技を続け世界に羽ばたいていく。競技を継続する選手育成への活動を行った。



Fig. 6 ユース世界選手権

「取組⑥」ユースナショナルチーム候補選手の輩出

- ・ユースナショナルチーム選考レースに積極的に参加する。
- ・2004年日本セーリング連盟公認ユースナショナルチーム候補選手に初めて選ばれた。以降今年度まで7年連続で選出され、ナショナルチームとして多くの科学的トレーニングや栄養・ルール面からの指導をしていただいた。

○結果：ナショナルチームの合宿や大会の後に、他の残留部員へ指導内容を還元することにより、チーム全体のレベルアップに繋がった。全国の強豪選手と共に活動することで、ライバル選手の特徴や性格まで知ることができ、全国大会でのプラスとなった。

○課題：残留組の海上練習時間の確保。指導者不足。

「取組⑦」ヨット競技継続者の増加

- ・大学生との積極的交流（合同練習、インカレ応援、大学卒業生からの後輩指導体制）
- ・本校ヨット部を全国の大学ヨット部にアピールする。

○結果：2003年以降、毎年大学で競技を続ける卒業生がでるようになった。世界選手権に日本代表として出場する選手も多くなり、今後が楽しみである。また、私の母校でもある金沢大学へは、2006年から2008年まで3年連続で進学。金沢大学は昨年の2009年全日本学生ヨット選手権に創部57年目にして初めて両クラスで出場。総合成績10位と国立大学No.1の成績を残した。

今年度3年生は、関西大学、中央大学、明治大学へそれぞれ進学し、競技を続ける。

○課題：日頃の学業との両立。

4. 練習活動の詳細

(1) 練習時間

ヨット競技は、海に出るまでに多くの準備時間と、着艇後も片付けとその日のミーティングが必要となる。一日の簡単な流れを下記に示す。

Table 1 一日の活動の流れ

順番	出艇前の内容（約40分）	順番	着艇後の内容
1	その日の海上コンディションの把握	8	着艇
2	選手の体調の把握	9	艇の片付け
3	艇の準備	10	ストレッチング
4	着替え	11	着替え
5	海上練習の内容把握	12	ミーティング
6	体操・ストレッチング	13	艇整備
7	出艇		



次に一週間の部活動時間を示す。この活動時間内で Table 1 の流れで活動している。

Table 2 一週間の部活動時間

期 間	時 間
平日	放課後練習 (15:50~19:30 3時間 40分) ※荒天日週一日はオフ・艇整備
土日、休日	一日練習 (8:40~19:30 10時間 50分)

## (2) 練習場所

下記に県内での本校ヨット部活動拠点を示す。毎日の練習は、ホームグラウンドである滝港マリーナ（羽咋市）で行っているが、秋から冬にかけては日本海の荒波をさげ、海上練習時間を確保するため、七尾市周辺の七尾湾での活動時間を増やしている。七尾湾周辺は波が穏やかで、十分な練習ができる。

Table 3 県内の活動拠点

期 間	施 設	練習海域
春～秋	滝港マリーナ（ホームグラウンド）	羽咋市千里浜沖
秋～冬	金沢大学ヨット部艇庫	七尾市七尾南湾
春休み・夏休み ・冬休み	七尾市中島町西岸公民館	七尾市七尾北湾
	国立能登青少年交流の家	羽咋市千里浜沖

## (3) 年間スケジュール

下記に年間スケジュールを示す。大まかな抜粋である。

Table 4 年間スケジュール

月	活動内容	月	活動内容
4	春休み合宿、新入生勧誘活動	10	大学生との合宿
5	GW 県外大会参加	11	新人戦、大学生との合宿
6	県総体、北信越大会	12	ユースショナルチーム合宿、クラブアルバイト
7	ヨット教室、国体選考、夏休み合宿	1	冬休み合宿、陸上トレーニング
8	夏休み合宿、全国高校総体	2	陸上トレーニング、県外遠征
9	県外合宿、国民体育大会	3	県外遠征、ユースショナルチーム合宿

## (4) チーム目標

平成 22 年のチーム目標は「全国制覇」である。毎年代交代式の後、最上級生を中心にその代のチーム目標を選手自身で決定する。その目標を達成するために、全選手、指導者、保護者が連携し活動する。

## (5) 羽咋工業高校最大の特徴「合宿」

年間約 120 日間の合宿や県外遠征、大会を行っている。つまり部員どうして 1 年間の 3 分の 1 を生活していることになる。チームで寝食を共にすることで、強い絆が生まれる。

特に夏休みと冬休みに行っている中島合宿は、ヨット部の象徴的合宿である。また合宿では、夜のミーティングで普段できないじっくりとした座学やビデオでの研究ができるため、ヨット競技においては非常に効果的である。下記に合宿風景やビデオ指導の様子を示す。



Fig. 7 全国高校総体



Fig. 8 自炊中島合宿風景



Fig. 9 ビデオ指導

## 5. まとめ

今年度でヨットの指導者として11年目を迎えた。10年間を振り返り、様々な活動から今感じていることを記す。指導者として部活動指導の目指す方向性が少しずつ変化していった。考え方が変わってきたのだ。当初は全国制覇するという結果目標を達成するため、その結果を得ることが最優先であった。そのためならあらゆることに取り組んできた。現在はその感覚とは異なる。生徒の「人間性の成長」が一番と考えるようになった。いかに高校3年間で成長できるか、成長させられるかが勝負だと。「勝つ」だけならば、もっと他の練習方法や時間の使い方もあるだろう。私の目指すものは今、「勝つ」だけでは満足できない。

指導者になって8年目の国体、悲願の全国制覇を達成した。あの感動は今も忘れることはない。もう一度味わいたい。ただ同じような味わい方ではなく、贅沢な感覚かもしれないが、違った感覚を得てみたいものだ。今後も過去の指導法にとらわれることなく、新しい試みを果敢に挑戦し生徒を成長させていく。

- 「今後の課題」 ①多忙 →OBOG、保護者との連携が大切 ②平成24年全国高校総体準備  
 ③日本セーリング連盟ジュニアユースコーチ就任要請 ④県外国外遠征 →残った生徒達の活動環境・内容  
 ⑤県高体連専門委員長 ⑥現場の生徒達との密な関係

# 体操競技の採点法と石川県審判員の現状

体操専門部

加賀高等学校 矢田 英

## 1. はじめに

スポーツには、色々な形で結果が見えるものがある。タイムや距離、得点、勝敗等。それらは多くの場合、その差がすぐわかりそして明確である。しかし、私の専門とする体操競技をはじめ、新体操、フィギュアスケート、トランポリン、飛び込み等の競技は自分の演技を他者から採点され、他者が評価した価値観が自分の成績になる。もちろんそこには厳密なルールが存在し、大会ごとに統一された意識の中で採点が行われるが、人間が人間を評価するとき感情が少なからず入ってしまうということは紛れもない事実である。私たちは、それすらも計算に入れながら自分の得点を考えて競技していかねばいけない。

世界選手権やオリンピックといった母国を代表しての争いは、まさに選手のみならずコーチ、審判までも巻き込んで代表団全員での戦いになる。

皆さんの目で体操競技の演技を見たとき、どのような演技が評価されるのか、どういった要素が求められているのかわからないと思う。審判員がどんなところを見て採点しているのかを紹介していきたい。

## 2. 採点法の変遷

体操競技の歴史的起源は、ドイツ体操の父といわれるヤーン（写真1）が命名したツルネンという運動にさかのぼる。1814年に第1回の競技会が行われたという記録が残っているがこの頃の規則はかなり単純なものであり、技の出来映えの比較、難しい技くらべといった感が否めない程度のものであった。1881年に国際体操連盟（F I G）が創設され、1896年の第1回アテネオリンピックから正式種目として実施されている。

採点規則というものが最初に作られたのは1949年のことである。しかし、実質的には1964年に発行された採点規則が10点を満点としたおなじみのルールの基盤となっており、その後、何度も改定をしながら2004年のアテネ・オリンピックまで続いていくことになる。

10点満点の時代の採点法は単純に言うと0.1刻みの減点法であり、そこに自分だけのオリジナル技やその当時では難しいとされていた技を行うと加点がもらえるという方式である。

4人の審判が提出した得点の最高値と最低値をカットし、中間点の平均がその選手の得点となる。（図1）その得点が各種目の主審と呼ばれる審判員が算出した得点から大幅に外れている時は、主審が他の審判を呼び協議することになる。主審を任命される人は採点の技術だけでなく、人間的にも優れた方でないと競技の公正さが保てなくなってしまう。

技の技術が進んでいくにつれ、演技の優劣をつけるのが難しくなってきた。選手の演技が現行の採点規則のレベルを超え、減点箇所がないと判断せざるを得ない演技も出てきた。その衝撃的演技を世界で最初に行ったのがご存じ、ルーマニアの「白い妖精」ナディア・コマネチである。（写真2）1976年、モントリオールで行われたオリンピック。当時、16才のコマネチは初出場ながら圧倒的な強さ、美しさを発揮し10点を連発。1番最初の10点の演技の時、審判団は長い協議の末、1.00と得点板に表示した。10点が出るとは想定になく、当時の得点板では10.00と表示できなかった。1.00の表示とともに場内アナウンスでこの演技は10点満点であるとコールされた。

採点規則はオリンピックごとに改定されることになっている。その後のルール改定で10点が出るような演技は生まれにくくなっていたが、1984年のロサンゼルス・オリンピックで

図1 得点記入表

### 体操競技得点票

班	組	団・個	演技	男子		ゆか・あん馬・つり輪・跳馬・平行棒・鉄棒					
				女子		跳馬・段違い平行棒・平均台・ゆか					
2	3	チーム・個人	規定・自由								
所属	背番号	選手名	審判員 試技順	主	1	2	3	4	有効合計	減点 タイム	得点
					能美	河北	鹿島	鳳至			
石川県 ・ 個人	11	輪島 一郎	2		<del>8.7</del>	9.0	9.0	9.0	18.0	68"	9.00 ○
	12	七尾 二郎	4		<del>6.8</del>	<del>7.4</del>	7.3	7.0	15.3		7.15
	13	羽咋 三郎	1		<del>8.2</del> <del>8.3</del>	8.5	8.6	<del>8.9</del>	17.1	0.1 72"	8.45 ○
	14	金沢 四郎	3		9.1	9.2	9.2	9.1	18.3	69"	9.15 ○
	15	小松 五郎			8.7	8.8	<del>8.2</del>	8.8	17.5		8.75
署名	記録主任	主任審判	競技部長	審判長	点検	チーム得点 (ベスト3) 26.60					
	松任	珠洲									

写真1 フリードリヒ・ルートヴィヒ・ヤーン

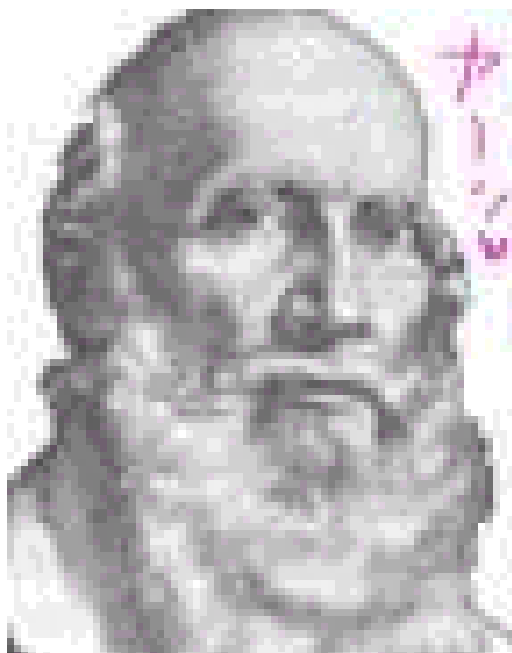


写真2 ナディア・コマネチ





事態は一変する。選手のレベルが向上していたのも一つにはあるが、それ以上に4年に1回のスポーツの祭典。アメリカ国民の持つ陽気な性格。会場の雰囲気が審判を飲み込み、着地さえ止まれば10点が出てもおかしくない。会場全体がそんな状況に染まっていた。日本の森末選手をはじめ、多くの選手に10点満点が連発され收拾がつかない状態になっていた。

特に森末選手（写真3）は団体規定演技鉄棒、団体自由演技鉄棒、種目別鉄棒と3連続10点満点を出し、歴史上ただ一人の30点満点のパーフェクト金メダリストに輝いた。

写真3 森末選手の鉄棒の演技



10点フィーバー、まさにお祭りのようなロサンゼルスオリンピックが終わった後、日本男子体操は低迷の時期に入る。採点規則は細かい変更を続けながらも安定した得点を導き出せる状況に落ち着いていた。しかし、10点満点という枠の中で採点をし、出場選手に序列をつけることに対して限界が来ていることを感じ始めた審判員が増えてきたことも事実である。

1996年、アトランタ・オリンピックを最後に規定演技が廃止された。規定演技でリードを奪い自由演技を確実にこなして逃げ切る。常勝日本の時代の必勝パターンであったが、より難しい技をたくさん演技に入れる構成が評価され、日本はその流れに乗り遅れた形になった。このオリンピック、日本男子は団体10位という屈辱に見舞われる。

その後、長い低迷期を経て2004年アテネ・オリンピックで日本男子体操は世界の頂点に復活した。（写真4）

写真4 アテネオリンピック団体優勝メンバー



このオリンピックを境にして、体操界は根本からの大変革を遂げる。10点満点の廃止。上限無しの青天井ルールの採用である。当然、採点法も大幅に変更された。

### 3. 現行の採点規則

新ルールではまず審判員の仕事が2つに分けられた。演技の難しさを採点する審判員（D審判）と演技の美しさを採点する審判員（E審判）である。今までは、一人の審判が技の難度も拾い減点もしていたのだが、演技が高度化していくにつれ、審判の記録が間に合わなくなって来ていた。そこで、難度を見る人、減点をする人と明確に仕事を分け、正確に採点ができるようにした。



## (1) D 審判の仕事

図2 難度と価値点

難度	価値点
A	0, 1
B	0, 2
C	0, 3
D	0, 4
E	0, 5
F	0, 6
G	0, 7

体操競技の技の難度にはAからGまであり、それぞれに価値点が定められている。(図2) また、技の類型別に5つのグループに分けられており、最低限1つのグループから1つ以上の技を演技に入れなければならない。D審判は選手が行った演技全てを速記等で記録し、難度が高いものから順に10個の技を抽出する。そして、その技が5つのグループを満たしているかを確認する。1つのグループを満たすと0.5の得点がもらえる。5つ全てを満たすと2.5の得点がもらえる訳である。それに10個の難度の価値点の合計を加算するとその選手のD得点が決定する。

この規則では、難しい技をやればやるほどD得点は上がることになる。理論上では、G難度10個とグループ得点で9.5、それに難しい技の組み合わせにより加点がもらえる場合があるので、10点近くまでは可能になる。

D審判は通常2名おり、当然2人のD得点は一致しなければならない。

## (2) E 審判の仕事

図3 減点の種類

少欠点	0, 1
中欠点	0, 3
大欠点	0, 5
落下	1, 0

E審判の仕事は美しさの評価である。10点からの減点法で図3に書かれているような法則で減点を重ねていき、最後に残った点数がその選手のE得点になる。

前述したように難しい技をやればやるほどD得点は高くなるが、その分、失敗の可能性は増えるしE減点も多くなる。逆に比較的易しい技ばかりで演技を組めばD得点は低い、E得点は高くなる可能性が高い。どちらの戦法でいくかは選手やその国、チームの考え方でどちらが正解なのかは何とも言えない。

D得点とE得点の合計が、その選手の得点となる。Dで攻めるのか、Eで攻めるのか、難しい判断ではあるが、忘れてはならないことは体操競技の本質であり、難しい技をいかに美しく演技するのか。ただ技を行うだけでは曲芸師やサーカスと同じである。競技としての体操は美しさを忘れてはならないのである。

## 4. 県内の審判員の現状と問題点

国内の審判員は4つのカテゴリー(図4)に分けられており、それぞれ審判できる大会の規模が違う。2種までは自分の地元の1種を持っている方の講習を受けることによって取得できるが、1種からは日本体操協会審判部の主催する講習会を受け、テストに合格しないと取得できない。また、1種取得者は4年に1回ずつ義務講習があり、その講習を受けないと資格の更

新ができない。1種取得者の中からD審判試験を受け、合格した方は1種資格とは別にD審判資格の交付も受けることができる。国際審判資格は、1種を持っている方で英語かドイツ語を話すことができ、国際審判講習を受け資格試験に合格しないと取得できない。国際審判は4年間の任期で、オリンピックごとに試験を受け直さなければならない。

図4 審判員のカテゴリーと審判できる大会の規模

カテゴリー	大会規模
3種	各地方の県大会まで
2種	ブロック大会まで（主審をのぞく）
1種	全国大会
国際	国際大会

本県では現在3種取得者が男女あわせて18名、2種が25名、1種が16名、1種取得者の中で国際資格を持っている方が男女1名ずつ、D審判資格を持っている方が男子で1名いる。その中から、県内大会やブロック大会、近隣で行われる全国規模への大会に派遣する審判員を出しているのだが、毎回審判員集めには苦勞しているのが現状である。特に、ブロック大会や全国大会は宿泊を伴うことがほとんどなのでなかなか要請しづらい。

必然的に、比較的自由のきく職業の方ばかりに負担がかかってしまうことになる。また、ブロック大会規模になると採点技術もある程度しっかりした方を派遣しないと失礼にあたり資格さえ持っていれば誰でもいいという訳にはいかない。

審判員の高齢化にも拍車がかかっている。本県体操の競技実績は、恥ずかしながら全国レベルからは置いていかれている状況で、そもそも部員不足に何とか対応してぎりぎりの線を綱渡りしながら組織を保っている有様である。選手がいらないということはすなわち指導者へ成長していつくれる卵がないということで、若い方が入ってきてくれる機会がほとんどない。

部員、選手の発掘は競技レベルの底上げだけでなく、指導者、審判員の育成まで含めた大きな問題になっている。その他、審判に来て頂いた方への謝礼、交通費等十分に渡せているとは思えず、半分はボランティアまがいで仕事をして頂いているのも、こちらとしては改善したい部分である。

県の協会としても、毎年3月に県内講習会を開き新規の審判員育成に努めているし、1種の資格を取得したい者に対し、旅費の補助や勉強会等も開催している。上級学校まで競技を続けた選手だけでなく、中学で辞めてしまった生徒や、高校の途中で辞めてしまった生徒等にも声をかけ、審判資格を取ってもらうよう声をかけたりしている。

様々な方法を試しながら審判員を増やそうとしているつもりだが、これという決定打が打てないのが現状である。

## 5. まとめ

体操競技をはじめとする採点競技と呼ばれる種目は、審判員がいなければ競技が成り立たない。前述したことのくり返しになるが、選手の育成はもとより審判員の育成に力を注いでいかなければ競技運営に大きな支障がでることになる。北信越の他の県でも同じ様な状況になっているようだ。日本の体操競技界は、アテネ・オリンピックで金メダルを奪回してから順調な波に乗っているように見える。しかし、それはトップレベルの選手、中央の関係者の周りだけの話しであって、地方の窮状は全国的にどこも同じである。今こそ、数十年後の体操界を見越した選手の発掘、指導者、審判員の育成に目をむけなければいけない時期に来ている。

第4回県研究大会参加者名簿

	学校名	氏名			
1	大聖寺実	西田京美			
2	加賀聖城	波佐間英之			
3	大聖寺	奥野洋子			
4	加賀	矢田英			
5	小松商業	笹生裕子			
6	小松工業	中森茂明	瀧川明生	中田裕己	
7	小松市立	豊田浩			
8	小松	北橋浩志	荒川富夫		
9	小松北	中川太			
10	小松明峰	安田誠二	中谷昌和		
11	寺井	山下修	山岸亜矢	達光洋	
12	鶴来	小林真	中村司		
13	松任	山口賢一	中川裕恵	坂本政男	
14	翠星	北中弘規			
15	野々市明倫	荒川洋一			
16	金沢錦丘	多井伸明	瀬戸博邦		
17	金沢泉丘	神田康	吉田洋		
18	金沢二水	木村哲也	谷口友春	衆徒勇	
19	金沢中央	嶋田崇			
20	金沢伏見	佐藤昌宏	角橋茂則		
21	金沢辰巳丘	田村達	舛田吉光		
22	金沢商業	東方涉	森田充哉		
23	県立工業	斉藤智之	島屋豊		
24	金沢桜丘	横田禎	寺西了	小田哲生	石川貴之
25	金沢市工業	水内浩	増田英樹	中田智晴	
26	金沢西	新田宗行			
27	金沢北陵	後川徳人	大谷内圭介		
28	金沢向陽	赤穂真	中川義之	山首一恵	
29	内灘	守屋英樹			
30	津幡	奥村誠			
31	宝達	金木勝			
32	羽咋	宮寄宏正	田畑武志	舘直人	
33	羽咋工業	岩城宏志	中越顕治		
34	志賀・高浜	高田浩			
35	富来	倉脇寛支			
36	鹿西	高行彦			
37	七尾東雲	出村豊	西田竹志	藤原知弘	
38	七尾尾	藤井岳人	中村三成		
39	七尾城北	竹田雪子			
40	田鶴浜	山本久枝			
41	穴水	土佐厚郎			
42	門前	白木正文			
43	輪島	小杉央子			
44	能登・能都北辰	大屋省吾			
45	能登青翔	深見宣夫			
46	飯田	西村剛			
47	ろう学校	吉田亮介			
48	明和特支	日野学			
49	いしかわ特支	小山二郎			
50	七尾特支	土佐智美			
51	金大付属	野村いずみ			
52	小松大谷	関戸達朗			
53	北陸学院	芳養朋子			
54	遊学館	植木大	中田浩文		
55	金沢	波佐間美樹	竹崎幸明		
56	尾山台	中曾浩平	大内史子		
57	金沢学院東	山本憲二			
58	鵬学園	田中千秋			
59	日本航空	南健介	小林学	田中和文	
60	石川高専	河合康典			

96名

# 平成22年度 第45回全国高等学校体育連盟研究大会 開催要項

- 1 趣 旨 財団法人全国高等学校体育連盟に加盟する各高等学校体育・スポーツ指導者の資質の向上を図るため、日頃の研究成果を発表するとともに、当面する諸問題について情報を交換し、高等学校教育の一環としての体育・スポーツの振興・発展に資する。
- 2 主 催 財団法人全国高等学校体育連盟
- 3 共 催 兵庫県教育委員会 姫路市教育委員会
- 4 後 援 文部科学省 兵庫県立高等学校長協会  
兵庫県市立高等学校長会 兵庫県私立中学高等学校連合会
- 5 主 管 財団法人全国高等学校体育連盟研究部 兵庫県高等学校体育連盟
- 6 期 日 平成23年1月13日（木）・14日（金）
- 7 会 場 兵庫県立武道館  
〒670-0971 姫路市西延末504 TEL (079)292-8210  
FAX (079)292-9210
- 8 参加者 各都道府県高等学校体育連盟加盟校の体育・スポーツ指導者及び高等学校の部活動に興味関心を持つ指導者・研究者・学生
- 9 大会主題 「スポーツが自らの可能性と夢を拓く」  
～はばたけ！高校生～
- 10 内 容 (1) 課題研究  
(2) 分科会  
第1分科会 「競技力の向上」  
第2分科会 「健康と安全」  
第3分科会 「部活動の活性化」  
(3) 講演  
講 師 三村仁司氏 「(株) ミムラボ 社長・アディダス専属アドバイザー」  
『現代の名工』世界に通じるシューズ作り  
「金メダリストを支えたシューズに込めた思い」

## 11 日 程

時間	9	10	11	12	13	14	15	16	17
月日									
1月12日（水）						①	②		
1月13日（木）		受 付	開 会 式	全体会 (課題研究)	昼 食	分 科 会			
1月14日（金）		全体会 (分科会報告・ 表彰・講評)		全体会 (講演)	閉 会 式				

①発表者・助言者・司会者打合会議

②財団法人全国高等学校体育連盟研究部委員会会議

## 12 表 彰

分科会の中で優秀な研究発表については表彰する

平成22年度 全国高体連研究大会「課題研究／研究部」発表者一覧

都道府 県名	発表テーマ	氏名	所属校
千 葉	運動部活動と社会人育成 ～「社会人基礎力」をはじめとする社会のニーズと運動部活動の方向性～	カマル サシ 金丸 哲志	千葉県高等学校体育連盟 研究部 千葉県立船橋二和高校
広 島	高体連活動に新しい価値を見出す広島風アプローチ ～ 感動の発信！広島県高校生 レポーターキャラバンがつむぐスポーツコミュニティー～	オダキ カエ 尾崎 隆枝 ミヤト ケイ 宮本 賢一	広島県高等学校体育連盟 事務局次長 広島県立西高校 広島県高等学校体育連盟 理事長 広島県立広島皆実高校

平成22年度 全国高体連研究大会「分科会」発表者一覧

分科会 テーマ	都道府 県名	発表テーマ	氏名	所属校
第1分科会 競技力の向上	長 野	生徒の自主性を促す実践 ～ウエイトリフティング競技による試み～	ウシヤ セイゴ 牛山 成剛	松奈学園高校
	神奈川	神奈川県内の競技力向上の取り組みについて ～チーム神奈川にむけて～	タテガ エイジ 立貞 栄司	横浜市立南高校
	広 島	One for ALL ALL for One ラグーマンの挑戦 ～思春期の思い出が人生に大きな影響を与える～	ウメト マサル 梅本 勝	尾道中学・高等学校
	福 島	福島県における自転車競技力の向上について	マダラ マチ 班目 真紀夫	福島県立白河美業高校
第2分科会 健康と安全	大 阪	屋外競技における雷対策について ～安全を図る指針の作成～	ヨシ デン 吉野 傳一	関西大倉高校
	北海道	運動部活動顧問のための安全対策マニュアルの発刊とその効果 ～利用状況調査・分析と課題～	ナンバラ ケンジ 南原 賢二	北海道北広島西高校
	群 馬	高校ラグビーのマウスガード使用状況に関する研究 ～選手のアンケート結果から見えたマウスガードの効用について～	サライ キヨシ 櫻井 清	群馬県立高崎工業高校
	愛 媛	ボート競技における安全性についての一考察	トクカ タシ 徳岡 剛	愛媛県立松山東高校
	秋 田	トレーナーからみたスポーツ障害の防止 ～高校生の現状と解決方法について～	トシマ ヨシオ 戸島 義夫 サキ アツシ 佐々木 篤	秋田県立秋田北高校
第3分科会 部活動の活性化	高 知	「馬術」不毛の地での戦い ～競技力の上をいく何かを求めて～	コヤマ バジメ 小山 創	高知県立幡多農業高校
	埼 玉	埼玉県の運動部活動の普及への課題と取り組み ～アンケート結果と県高体連の取り組みについて～	シオバラ カツキ 塩原 克幸	埼玉県立大宮高校
	新 潟	地域に根ざした競技にするために ～部活動の活性化に結びつける～	シバヤ タシ 澁谷 毅	新潟県立分水高校
	兵 庫	兵庫県における高等学校部活動の活性化を目指して	ヤマサキ リツシ 山崎 哲俊	兵庫県立伊川谷北高校



# 編集後記

今年も研究紀要を発行でき、大変うれしく思います。

今年度より委員長を引き受けることになり、試行錯誤の中でスタートしましたが、研究紀要の発行をもって今年度を無事終了することができました。第4回を迎えた県の研究大会も成功裏に終わり、ほっと胸をなで下ろしているところです。しかしながら、まだまだ県高体連・高体連研究部としての課題もあり、今後も一つずつ課題をクリアし、県高体連・高体連研究部が発展するとともに県全体の活性化につながればと思っております。来年の全国研究大会鹿児島大会においては、「部活動の活性化」の分科会でトランポリン専門部の発表が行われます。その研究発表が、石川県代表としてよりよいものになるよう、バックアップをしっかりと行っていきたくと思います。

また、昨年度から紀要を蓄積していこうと、各学校にクリアファイルとDVDをお渡ししましたが、今年度より県高体連のホームページに載せていくことにしました。年度毎にかわり、ご迷惑をおかけしますが、今後はホームページからご覧いただきご活用いただければと思います。

最後になりましたが、関係各機関や調査研究委員の方々にこれまでのお礼と感謝を込めて、編集後記といたします。 (達 光洋 記)

## 平成22年度石川県高等学校体育連盟調査研究委員会名簿

	地区	氏名	学校名
部長	副会長	中嶋 敏一	寺井
委員長	副理事長	達 光洋	寺井
委員	加賀	中川 裕恵	松任
		中谷 昌和	小松明峰
	金沢	串田 孝子	星稜
		大谷内 圭介	金沢北陵
		齊藤 智之	県立工業
		神田 康	金沢泉丘
	能登	中越 顕治	羽咋工業
		中村 三成	七尾